

## I 鹿嶋市教育行政評価委員会答申

平成 24 年度鹿嶋市教育行政評価について、審議した結果を以下のとおり答申します。

### はじめに

教育行政評価委員会は、教育委員会による自己評価を外部者の視点から評価し、答申としてここに報告するものである。本報告が地域住民や議会、首長に対する教育委員会の説明責任をいっそう明確化するものとなれば幸いである。今後も教育委員会が適切な目標設定を行い、確実な事業実施を進め、また得られた結果を検証することを通じて更なる教育の向上・普及に努められることを期待したい。

鹿嶋市における教育行政の実施計画は、鹿嶋市教育基本計画（後期：平成 21～25 年度）（5つの重点目標設定）として策定され、そのなかで単年度の方針として「鹿嶋市教育行政運営方針（平成 24 年度）」が設定されている。よって本答申は、鹿嶋市教育基本計画（後期）、平成 24 年度鹿嶋市教育行政運営方針、そして平成 24 年度教育行政評価シート（以下「評価シート」という。）などを主な資料として審議し、見解をまとめたものである。なお、前年度に引き続き、平成 24 年度についても BSC（バランス・スコアカード）の視点を盛り込んだ評価シートによって主要重点事業ごとに評価を行った。

### 総合評価

平成 24 年度の教育行政評価は、評価シートの評価項目と区分に関する見直しを行って評価シートを計 15 領域に絞ったうえで実施した。その結果、12 の評価項目が A 評価、また 3 つの評価項目が B 評価となった。よって平成 24 年度の教育行政は、教育行政運営方針に従って、各種の事業がおおむね適正に実施されたといえる。また、今回の評価シートでは「必要性」、「執行段階の効率性」、「有効性」の視点を取り入れることで、各事業の投入コストと事業によって得られた結果の関係をわかりやすくすることに努めた。

なお、評価点の算出については以下のとおりである。各事業領域（各評価シート）のそれぞれにおいて施策別に「執行段階の効率性」（3割）・「有効性」（4割）・「執行工夫・日常業務改善の取組」（3割）について判定（A, B, C）を行い、これらに傾斜比率（A=1.0, B=0.7, C=0.5）を乗じて個別事業ごとに実績評価点を算出した。そしてその合計を総合評価の点数とし、その総合評価合計点が 80 点以上を A, 80 点未満～65 点以上を B, 65 点未満を C とした。

後述するように 15 項目に亘って各事業が適切に、かつ、効果的に実施され

たといえるが、そのなかでも、以下の事業はとりわけ特筆されるものとして評価できる。（評価シートにおける総合評価 100 点満点中、89 点以上）。

英語教育の充実（重点目標 3，（5））は、昨年度に引き続き、実施とその成果を高く評価できる事業である。小学校 1 年生から中学校 3 年生までの義務教育 9 年間を見通した教育事業という意味でも出色である。また教職員の力量を向上すべく研修にも努めており、鹿嶋市の特色ある事業として評価できる。新学習指導要領では「外国語活動」（5，6 年）が必修となったが、今後も外国語教育のニーズの高まりは予想され、いっそうの発展が期待される。

スポーツ事業の開催と機会提供及び市民スポーツの支援（重点目標 4，（6））は、サッカーフェスティバルや武道大会の開催、駅伝やビーチサッカーなどの広域大会の開催についても市民ニーズを十分に満たしており、高く評価される。

各地区まちづくりセンター活動支援、芸術祭、市美術展覧会等の開催（重点目標 4，（7））は、東日本大震災を契機とした防災意識の高まりを受け、その後、活発な活動とこれに対する支援が評価される。芸術祭や美術展覧会も含め、今後も新たな取組や新規参加者の増加が課題である。

学校施設の改修と整備（重点目標 5，（9））は、児童生徒の生命と安全確保のために必要不可欠な事業である。平成 24 年度は、主要事業として大野中学校における特別教室棟内の理科室及び家庭科室等の管理教室棟への移設整備及びその後の特別教室棟の解体・撤去に関する事業として実施された。コスト削減と適切な工事实施が高く評価される。

教職員の資質の向上（重点目標 5，（13））は、指導主事による学校支援と「鹿嶋師範塾」を中心的な事業として、教職員の資質の向上を多面的に支えている。活動実績の豊富さや改善方針の明確さが高く評価される。

高塚奨学基金制度の充実（重点目標 5，（14））は、経済的理由によって就学が困難な生徒・学生に対して学資（奨学金）を貸与する事業である。平成 24 年度は新規奨学生の確保に関して、過去数年来の落ち込みを著しく改善することができたことが高く評価できる事業である。

## 1 平成 24 年度教育行政運営方針における主要事業評価

以下では、評価シートを用いて、個別事業に関する事業評価の結果を中心にその内容を報告する。

### 重点目標 1 豊かな心と生きる力の育成

#### （1）学校図書館の整備（A，87 点）

平成 24 年度は学校図書館の整備についてこれまで十分に整備されてこなかった学校について整備を完了することができた（豊郷小，豊津小，大同東小，

鉢形小)。指標としてみれば、小学校の児童一人当たりの貸出冊数は減少しているものの読書量は増加しており、成果が見られる。一方、中学生の読書量は5%減で、やや停滞しているといえる。他方、高松小学校が「子どもの読書活動優秀実践校」として文部科学大臣賞を受賞するなど、市内には成果が顕著な学校もある。そういった成果が各学校に広まること、そして小学生における読書に対する関心が中学生になってからも継続することが課題といえる。

また、司書不在時における学校図書館運用や中央図書館との連携強化等、運用面の課題はあるが、これら課題が明示されており、今後も進展が期待できる。

## 重点目標 2 学力の確実な向上

### (2) 学力向上の推進 (B, 70点)

①小学校における少人数学級、②専科教員、AT・TT講師の配置、③学力診断テストについてそれぞれ実施している。

①は、市独自に採用した市費負担教職員(5人)を配置し、市内全小学校における1・2学年の学級を30人以下に編成している。②は、小学校4年生以上の高学年における教科(理科・音楽)について、指導における専門性を向上させるために中学校免許を有する専科教員を3人配置している。また、ATやTTについては、学習の遅れそうな児童生徒を指導・補助することを目的として行っている。なお、配置数は、ATが34人(嘱託職員21人・臨時職員13人)、TT講師が嘱託職員17人、専科教員が理科1人、音楽2人であった。③は、茨城県学力診断テストにおいて県平均を目標めやすとして改善に取り組んできた。小学校についてはおおむね目標を達成したが、中学校については引き続き課題を残した結果となった。

本事業は、内容及び経費の規模から見て、重要度の高い事業の一つといえる。そして上記に述べた取組は、他自治体の状況を見ても、積極的に取り組んでいる点で評価できる。だが、今年度の評価シートではB評価、70点となっており、他の事業に比べても必ずしも十分な実績を上げたものとして評価することができていない(各評価シートの平均は84.6点)。このことは事業として企画し、実施するという段階での重要度の一方で、いかなる評価をもってその成果や到達度を測りうるのか、事後としての評価の在り方がうまく結び付けられていない点に課題があるといえる。すなわち目標設定そのものに課題があるといえるが、そういった目標の達成と成果の検証についてももう少し緻密な課題を設定する必要があるといえる。例えば、一方で学力テストとして事後評価の容易な面もあれば、他方で支援的な教職員の学習に対する効果はそういった結果としてよりも、学習プロセスにおける運用面での評価が求められるのではないかと。総じて、事業そのものの課題と合わせて、この事業をどのように評価するかと

いう課題について引き続き、検討を要するといえる。

※TT（ティームティーチング）・・・複数教員による指導形態

AT（アシスタントティーチャー）・・・学習活動支援員

### （３）長期欠席児童生徒解消（A，88点）

①不登校等対策連絡協議会の取組，②幼稚園・保育所・小学校の連携，③小中連携による中1ギャップの解消，④教育相談指導員によるカウンセリング及び適応指導教室相談員による学校・家庭訪問について取り組んでいる。

①は、情報の交換・共有を基本的な活動として、具体策の検討等を行っている。②は、幼児教育から小学校への円滑な接続を図るために生活科を核とした単元の構成など、スタートカリキュラムとして充実させてきた。平成24年度は内容の見直しを進めるとともに冊子配布等によっても活発化してきた。③は、中学校区を単位とした小中連絡協議会を開催するなど、中学校進学後の適応がいっそうスムーズになるように努めている。他方で、なお、長欠者及び不登校生徒数を減少させることが課題である。④は年々、ニーズが高まってきているものであるが、各校における毎月1回以上の訪問、追加要請への対応など、十分に評価できる。

本事業は課題を明確にして取り組んでおり、そのための取組も実績を積み重ねていると評価できる。評価シートでは今後の課題も明確化されている。

## 重点目標3 郷土理解教育と国際理解教育の推進

### （４）鹿嶋市の歴史・文化・伝統の普及と発信（A，86点）

①はまなす郷土資料館，どきどきセンターにおける企画展，②郷土かるた，民話の普及，③ミニ博物館の運営，④小学生の参加による鹿嶋の歴史探検隊について取り組んでいる。

①は、企画展「鹿島信仰」と同移動展を実施した。参加者数の増加が課題である。②は、ボランティアを中心とした活動ながら、小学校・幼稚園等で56回もの活動を行っている。③は、企画展「塚原ト伝」，「鹿嶋のまつり」を実施し、入館者も予想より多かった。④は、郷土学習の一貫として評価できる。

文化伝承と郷土学習としての意義や成果、今後の課題も明確である。今後も事業の進展が期待できる。

### （５）英語教育の充実（A，90点）

英語指導事業の推進として、小学校1・2年生20時間，3～6年生35時間，中学校35時間を計画どおり実施した。また市内全小中学校に英語を母国語とする英語指導助手を配置している。さらに、中学生国際交流事業を実施してい

る。教員研修会や小中学校合同研究会も精力的に取り組んでいる。

総じて、鹿嶋市独自の英語教育活動は内容、実績及び成果について意義の高い事業として評価することができる。小学生の興味・関心の高さも評価できる。他方で、課題は中学生の英語力向上や学力診断テストにおけるその成果の検証など、明確化されている。いっそうの成果を期待したい。

#### **重点目標 4 スポーツ・芸術文化活動の振興と市民交流の推進**

##### **(6) スポーツ事業の開催と機会提供及び市民スポーツの支援 (A, 90点)**

①シンボルスポーツの推進としてサッカーフェスティバルと武道大会の開催は、PR・運営・実施の各側面について高い評価が与えられる。②駅伝やビーチサッカーなどの広域大会も同様に市民ニーズを十分に満たしている。③スポーツ団体の指導者研修会等、支援を行っている。④地区まちづくりセンターでは、研修を積んだ鹿嶋市スポーツ推進委員が健康教室を実施している。

各事業についておおむね成果を挙げている。なお、団体支援の内容や在り方について課題があると思われ、引き続き内容の検討が必要といえる。

##### **(7) 各地区まちづくりセンター活動支援、芸術祭・市美術展覧会等の開催 (A, 91点)**

各地区まちづくりセンターの取組は、とりわけ東日本大震災を契機とした防災意識の高まりを受け、その後の取組が引き続いて継続されていることもあり、活発な内容となっている。また、芸術祭及び市美術展覧会も当初予定どおりに開催された。実行委員及び出品者の固定化や高齢化は引き続きの課題といえるが、少しずつ新しい参加者も出てきている。

まちづくりセンターにおける防災マニュアルづくりや防災訓練の実施は震災が一つの契機になった活動として評価できるが、いずれにしても新たな取組や新規参加者の増加が中心的な課題として指摘できる。

##### **(8) 神野向遺跡保存事業 (B, 70点)**

国・市指定遺跡の整備遺跡等、文化財に係る保存と、広く市民への伝承を目的とし、意義が高く評価される事業であり、史跡の全体約94%についてこれまでに公有化を完了してきた。本事業は、公有化の進捗状況など、他事業に比して困難な課題があるため、評価シートとしては厳しい評価にならざるを得ない面があるが、事業の意義や管理・実施の内容そのものは十分に評価できるものとなっていると思われる。全体の公有化とともに市民の意見要望を取り入れた今後の事業計画の進展が期待される。

## 重点目標 5 安心して学べる教育環境づくり

### (9) 学校施設の改修と整備 (A, 100点)

平成 24 年度における本事業は、大野中学校における特別教室棟内の理科室及び家庭科室等の管理教室棟への移設整備及びその後の特別教室棟の解体・撤去に関する事業である。当初は、特別教室棟の改築工事を想定していた。しかし、今後の生徒数減少が予想されるため、管理教室棟に余裕教室を見込み、よって上記の移設工事によって、特別教室棟の改築工事から解体撤去工事に変更した。これによって、国の補助対象外の工事となったが、当初計画に比して大幅な予算削減を実現することができた。

よって本事業は、計画、予算及び実施について十分にその効果を評価できるものといえる。

### (10) 社会教育施設の整備 (A, 82点)

各まちづくりセンター及びスポーツ施設等の修繕及び整備に関する事業である。市内の社会教育施設及び社会体育施設(18施設)のうち、14施設は築15年以上が経過し、今後も順次、整備が必要となる。なお、平成24年度には、まちづくり市民センターと大野ふれあいセンターに太陽光発電を設置した。非常時の電源確保のためのものであるが、通常時の経費削減の効果もある。

社会教育施設の整備・修繕については、これまでも適切に行われていると評価できる。他方、今後の評価に関しては、施設の耐用年数といったハード面の理由だけでなく、具体的な活動内容等、ソフト面との関連を明確にした計画をいっそう求めたい。

### (11) 安全・安心な子育て環境の整備 (A, 80点)

①「放課後子ども教室」事業は、平日の部(4校)、休日の部(10地区)で実施し、伝承遊びやスポーツ活動を通して放課後における子どもたちの安心・安全な居場所づくりに貢献する事業として高く評価できる。②「青少年相談員による巡回活動」は、予算規模が限られるなかではあるが、活発な活動が展開されている。班長会議(年5回)はもとより、班別活動(年28回)、早朝夜間活動(各年5回)、祭り等特別一斉活動(年3回)、声かけ運動(年24回)、さらには脱法ハーブについての研修、相談員研修など、地道に取り組んでいる。また、③認定こども園の開設に向けた準備を進めている。

本事業の重要性は高く評価できる。また課題が増え、前年度に比して予算経費も増額された。引き続き、関係諸機関との緊密な連携により、事業の確実な進展を求めたい。

### **(12) 子育て講演会及び心とからだの講演会の開催 (A, 82点)**

新年度入学生の児童生徒の保護者を対象とした「小・中学校入学前子育て講座」、中学生を対象とした「心とからだの講座」を実施している。限られた予算のなかで実施されているが、意義は高く、とりわけ家庭教育への支援の観点からも事業の拡大や位置づけについても検討してもらいたい事業といえる。

### **(13) 教職員の資質の向上 (A, 89点)**

①指導主事(4人)による市内学校への訪問(計114回)によって、学校を支援し、また情報共有に努めている。そして、②「鹿嶋師範塾」では教職員及び市民を対象に23講座について、講義等を計105回に亘って実施し、合計で817人が受講した。この取組においては受講者からの意見や要望も取り入れて毎年改善を進めており、また今後における見直しの方針も明確であり、高く評価できる。関連して、③教育指導員を配置し、運営や支援を充実させている。そのほか、④学力向上研修会の実施、⑤鹿嶋市教育会への補助など、教職員の資質の向上を多面的に支えており、十分に評価できる。

### **(14) 高塚奨学基金制度の充実 (A, 91点)**

本事業は、経済的理由によって就学が困難な生徒・学生に学資(奨学金)を貸与するものであり、経済の不況・不安定性が継続する今日にあって意義の高い事業である。一昨年(平成22)度の報告書においてその利用者数(18人)の低下が懸念されていたが、昨年(平成23)度は25人が採用となり、さらに今年度は最終的に29人の新規奨学生を決定することができた。これは募集方法や募集時期、市民へのPR方法などにおける地道な取組が改善につながったといえる。

### **(15) 教育委員会機能の強化 (B, 73点)**

教育委員会の会議開催は定例会議(年12回)と臨時会議(年2回)として開催され、議案の審議・議決を行い、市内小中学校とも事務局を通じて十分に情報交換を行い、連携強化に努めてきている。他方、昨今の地方教育行政をめぐる情勢を鑑みるに教育委員会機能の強化は必要不可欠といえる。教育委員会において審議すべき議案は様々であり、また審議に際し、教育委員による事前の検討を要すべき案件も今後いっそう予想される。こういった課題に対しての、機能の強化としての課題を明確化し、また着実に実行されることが期待される。

## 2 今後の教育行政評価の在り方について

本年度も BSC に基づく自己評価を用いて効果的かつ効率的な評価を適切に実施できたと考える。評価に関する実施スケジュールについても、昨年と同様に早期に進めることができ、また審議時間の短縮化についても改善が進んでいる。これらは執行部の成果といえる。

すでに述べたように本年度は「必要性」、「執行段階の効率性」、「有効性」という視点を明確にした。すなわち、財の投入としての「必要性」、事業実施によって得られた成果についての客観的な数値を中心に明示した「執行段階の効率性」、さらに市民・事業対象者の満足度等を加味する「有効性」の視点である。これらによって各事業の投入コストと事業によって得られた結果の関係をわかりやすくすることができた。

これらを踏まえて、以下では、評価シートにおける点数化と評価のための情報収集の重要性について述べたい。

鹿嶋市教育行政評価における評価項目の設定や評価手法そのものはおおよそ確立されつつある。また、評価に使用する指標や根拠となる数値の収集・集計についてもしっかりとなされている評価項目も見られる。他方で評価項目によってはまだ十分ではない評価シートも見られる。上記に述べた「必要性」、「執行段階の効率性」、「有効性」の視点を明確にすれば、次はそれぞれの段階を明示するために必要な指標や情報が明確でないと、点数化できる情報や指標が十分に得られずに、結果、事業そのものの総合評価が下がることになる。

この点をもう少し補足したい。昨年度の平成 23 年度評価では、「事業実施過程」に評価の比重を置いている。これはどちらかといえば、過程（プロセス）に対する評価である。平成 23 年度評価がプロセス評価に比重があったものが、平成 24 年度の評価では結果評価（執行段階の効率性、有効性）に比重があるといえる。このような評価に関する視点の違いが評価の総合点における違いとして表れたのが、例えば、「(2) 学力向上の推進」である（平成 23 年度は A 評価、83 点。平成 24 年度は B 評価、70 点）。文中においても述べたように、「(2) 学力向上の推進」の事業そのものは重要度の高さが評価され、また運用面における取組が評価される一方で結果評価につながる指標が十分に得られていないのではないか。他方、「(5) 英語教育の充実」（平成 23 年度は A 評価、89 点。平成 24 年度も A 評価、90 点）のように影響を受けずに引き続き高い評価を得た事業もある。すなわち後者については、それぞれの段階における評価の指標や数値、満足度等の情報を確実に得ることができているためと思われる。

いずれにしても、BSC の手法においては、評価指標の開発と情報の収集、すなわち根拠に基づく明確な評価を進めるべく、今後もいっそうの工夫・改善を求めたい。

### 3 教育行政評価委員会 審議経過

回数	期日	審議内容
第1回	平成 25 年 5 月 30 日	役員選出, 審議方法, 年間日程, 進め方
第2回	平成 25 年 6 月 25 日	自己評価説明及び質疑
第3回	平成 25 年 7 月 23 日	自己評価説明及び質疑
第4回	平成 25 年 8 月 26 日	自己評価説明及び質疑
第5回	平成 25 年 9 月 25 日	答申案の検討・取りまとめ

### 4 評価委員会委員名簿

氏名	所属等	備考
加藤 崇英	茨城大学 教育学部准教授	委員長
生井澤精二	元高等学校校長	副委員長
津島 隆	元小学校校長	委員
小野 忠志	NPO 法人かしまスポーツクラブ理事長 鹿嶋市スポーツ推進審議会委員	委員
白川利江子	元高松中学校 PTA 副会長	委員